様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5 月　26 日現在

機関番号：34416
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：21530896
研究課題名（和文）
父親の家庭教育参加に関する社会学的研究―ジェンダーと階層再生産の視点から
研究課題名（英文）Sociological Study on The Reproduction of Gender Order and Social Stratification: The Effects of Fathers' Involvement in Home Education
研究代表者
多賀　太（TAGA　FUTOSHI）
関西大学・文学部・教授
研究者番号： 70284461

研究成果の概要（和文）：
近年の「父親の家庭教育」をめぐる議論においては、「家庭教育」の指す意味は「しつけ」「世話」「学業支援」と多岐にわたっており、それぞれの意味は「保守主義」「男女平等主義」「新自由主義」という異なる思想に支えられていた。父親たちによる具体的な学業支援行動は「学校選択支援」「受験勉強支援」「受験生活支援」によって構成されていた。彼らの学業支援への関わり方は、父親の権威を保持したままで男女平等化に適応することと、子どもの階層的下降を防止することに適合的なものであった。

研究成果の概要（英文）：
Recent discourses which encourage fathers to get involved into home education are based on such multiple ideas of home education as "discipline," "care," and "support for academic work." Each idea is based on such different streams of thought as "conservatism," "gender-equality" and "neo-liberalism" respectively. Fathers' support activities for children's academic work consist of "guidance for school-choice," "tutoring for an examination" and "assistance with daily living." The ways in which fathers are involved in home education are suitable for following the trend of gender-equality while keeping up father's authority, and for avoiding the downturn of children's socioeconomic statuses.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育社会学
キーワード：ジェンダー、階層、父親、家庭教育、男性性、生活史、男女共同参画

１．研究開始当初の背景

本研究は、父親の家庭教育参加という特定の社会現象の詳細な分析を通じて、現代日本社会における階層構造とジェンダー構造のダイナミクスの一端を明らかにす

ることを目的として計画された。

本研究の開始当初、政府審議会の答申や啓発パンフレットなどにおいては父親の家庭教育参加を促す言説が、また商業雑誌においては中学受験を中心とした学習支援への父親の積極的参加を促す記事が散見されるようになっていた。しかし、教育社会学およびその関連領域において、父親の家庭教育に焦点を当てた研究はほとんど見られなかった。そうしたなかで、研究代表者は、(1)子育て研究、(2)階層研究、(3)ジェンダー研究という３つの研究領域との関連で、父親の家庭教育参加の実態を明らかにすることの意義を次のように見出した。

(1) 父親の家庭教育参加の実態の解明は、従来の子育て研究の「空白」領域を埋めることにつながる。2000 年代になってから「父親の育児参加」研究が盛んに行われるようになってきたものの、そのほとんどは「育児」を乳幼児期の「世話」に限定してとらえており、学齢期以降の父親の子育てに焦点を当てた研究はわずかである。政府の主導による「父親の育児参加」キャンペーンが展開されて 10 年が経過し、子育ての長期化と子育て水準の上昇が指摘されるなか、父親による学齢期の子どもの子育てへの関与が増大してくることは十分に考えられる。子育て研究においては、父親による乳幼児期の「世話」への注目だけではもはや不十分であり、父親による学齢期以降の「子育て」の実態を明らかにすることも求められる。

(2) 階層研究の文脈においては、父親の家庭教育参加の実態の解明は、階層再生産に関わる家族の教育戦略の内部過程を明らかにすることにつながる。家族の教育戦略に関する従来の研究では、家族が「戦略」を展開する最小単位とみなされたり、家庭教育の主たる担い手とされる母親に焦点が当てられたりすることが多く、父親に焦点が当てられることはほとんどなかった。また、量的分析においては、子どもの教育・職業達成を説明する変数として父親の職業階層や学歴が措定されてきたが、父親のそうした教育資源が具体的にどのようにして子どもたちに伝達・譲与されているのかについては十分には明らかにされてこなかった。父親の家庭教育参加や家庭教育意識の具体的な様相の解明は、これらの課題の克服に寄与すると考えられる。

(3) ジェンダー研究の文脈において、父親の家庭教育参加の実態の解明は、ジェンダー構造の変化と持続のプロセスの一端を明らかにすることにつながる。父親の家庭役割への参加の増大は、一見すると家庭内の男女平等化を促進するように見える。しかし、父親が家庭役割に参加したからといって、公的領域での男女平等化が促進されるとは限らないし、父親の家庭役割への参加の仕方次第では、それがむしろ家庭内の男女平等化よりも父親の権威の増大と男性支配体制の正当化につながる可能性もある。父親の家庭教育参加が家族と社会におけるジェンダー構造に与えるインパクトを明らかにするためには、まずは父親の家庭教育の実態の詳細を明らかにする必要がある。

２．研究の目的

上記の問題意識を背景として、次の３点を研究の目的として設定した。

(1)「父親の家庭教育」言説の内実およびそれが喧伝されるようになった社会的背景の解明

(2) 父親による家庭教育とりわけ中学受験支援のマクロレベルとミクロレベルの両面にわたる実態把握

(3) 父親による家庭教育参加が階層構造とジェンダー構造に与えるインパクトの考察

３．研究の方法

上記の目的を達成するため、次の３つの研究方法を用いた。

(1)「父親の家庭教育」言説の内実およびそれが喧伝されるようになった社会的背景を解明するために、政府の審議会答申と商業雑誌の記事に見られる「父親の家庭教育」言説の分析を行った。「言説」の定義および「言説分析」の方法論的立場には様々なものがあるが、本研究では、鈴木譲と東野充成の議論に依拠し、「父親の家庭教育言説」を「特定の時代に特定の人々が父親の家庭教育に関して表現した内容」ととらえ、「言説分析」を「諸言説の動態や布置連関を史的に明らかにするとともにその背景となる政治情勢・経済情勢・社会変動を分析すること」ととらえた。

(2) 父親による子どもの中学受験支援に関するマクロレベルでの実態を把握するた

めに、関連する調査のレビューと再分析を行った。具体的には、文部科学省の公式統計、民間の研究所による全国調査の結果、中学受験に関する先行研究に依拠しながら、中学受験の全国的動向、ならびにそこへの父親の関与の動向を把握した。

(3) 子どもの中学受験支援に積極的に関与する父親の行動と意識の詳細を明らかにするために事例分析を行った。事例の収集にあたっては、首都圏、関西圏、九州・沖縄地方のそれぞれに居住する合計15名（父親13名と母親2名）に対して、「対象者および配偶者の生活史と生活構造」「中学受験の経緯」「受験支援の具体的様子」「教育意識と子育て参加の変遷」を主な質問事項とする半構造化面接を実施した。事例分析に際しては、面接内容をすべてテキスト化したうえで、佐藤郁哉が提唱している「事例ーコード・マトリックス」を作成し、各事例間での横断的分析ならびに各事例固有の文脈を重視した個別事例分析の両方を行った。

４．研究の成果

(1) 言説分析からは次の点が明らかになった。近年になって喧伝されるようになった「父親の家庭教育」言説は、従来の父親言説の流れを引き継ぎつつ、新たな流れの父親言説を取り込みながら、複数の異なる意味の「家庭教育」によって多義的・重層的に構成されていた。「家庭教育」の多義性は、「しつけ」「世話」「チュータリング（学習支援）」という３つの類型として把握された。

①「しつけ」の意味で「家庭教育」を用いる用法は、政府審議会の答申に典型的に見られた。この文脈では、父親の存在の希薄化による家庭のしつけ機能の低下が問題とされ、伝統や道徳の強調によって秩序維持と社会統合を図ろうとする保守主義の影響が見出された。この類型は、戦後繰り返し喧伝されてきた「権威としての父親」言説の系譜に位置づくものであった。

②「世話」の意味で「家庭教育」を用いる用法も、政府審議会の答申に典型的に見られた。この文脈では、母親への「世話」負担の集中とその結果としての女性の社会的地位向上の阻害が問題とされ、男女平等主義の影響が見出された。この類型は、1990 年代から顕著になってきた「ケアラーとしての父親」言説の系譜に位置づくものであった。

③「家庭教育」のうち特に「チュータリング」を強調する言説は、サラリーマン層を主な読者とする商業雑誌に典型的に見られた。この文脈では、競争が激化した受験情勢に対する父親の認識不足と不適切な対応が問題とされ、新自由主義の影響が見出された。これは、2000 年代になって顕著になってきた新しい父親言説の類型であった。

(2) 中学受験に関する既存調査のレビューと再分析からは次の点が明らかになった。

①中学受験率ならびに私立・国立中学に通う生徒の割合については地域差が非常に大きい。全国的には、2007 年度に私立中学に進学した中学生の割合は 7.1%、同年に小学6年生をもつ家庭で私立・国立中学または公立中高一貫校の受験を考えていたのは13.2%に過ぎないが、人口規模が大きい地域ほど中学受験を考えている家庭や私立・国立中学に通う生徒の割合が高い傾向にある。都道府県別に見ると、2007 年度に私立中学に通う生徒の割合は、東京都で26.5%と突出しており、神奈川、京都、大阪、兵庫、奈良、広島、高知の７府県では10%を超えているが、その他の道県では10%未満と相対的に低くなっている。

②全国的に見て、通塾や中学受験の意思決定において最も主導権を握っているのも、日頃の子どもの学習支援を中心に担っているのも母親である傾向が見られる。しかし、私立中学を受験しようと考えている家庭に限れば、父親も教育情報の収集により積極的であり、勉強を教えたり社会の出来事について子どもと話したりする割合が母親よりも父親で高い傾向にある。商業雑誌で喧伝されている、子どもの中学受験支援に積極的に関与するという父親像は、確かに現代日本における一般的な父親像とはいえないものの、決して例外として片付けられるようなごく希な事例でもないことが確認された。

(3) 子どもの中学受験支援に積極的に関与している（してきた）父親らに対する面接調査からは、本項から(5)までに記す知見が得られた。まず、「子育て研究」との関連では、以下の知見が得られた。

①父親たちの受験支援行動は様々な側面にわたっており、それらは、学校の情報を調べて子どもの適性や学力を勘案しながら受験校選択のアドバイスをする「学校支援選択」、子どもに直接勉強を教えたり

勉強のスケジュールや教材を作成したりする「受験勉強支援」、子どもの通塾時の送り迎えや模擬試験時の付き添いといった「受験生活支援」という３つの類型として把握された。

②このことから、中学受験支援に関与する父親たちの間で、客観的行動レベルにおいても、当事者の主観的認識においても、かつての〈扶養〉にほぼ限定されていた父親の役割が、新しいあり方へと変化していることが示唆された。舩橋（1988）の整理を援用するならば、彼らは、「学校選択支援」や「受験勉強支援」という形での〈社会化〉のみならず、「受験生活支援」という形での〈世話〉、さらにはそうした活動を通した子どもとの感情的なぶつかり合いや精神的絆の深まりといった〈交流〉に至るまで、受験支援活動を通じて親役割のあらゆる要素に関与していた。

(4) 「階層研究」との関連では、次の知見が得られた。

①先行研究における指摘の通り、父親たちの中には、子どもを中学受験をさせるという自らの選択に、公立学校の教育に対する否定的評価を背景とした「教育的リスク回避」としての意味を見出している者が見られた。しかし同時に、私立学校の教育のあり方を積極的に評価し、中学受験に、親の地位を超えるという「上昇」の手段としての意味を見出したり、水平方向に他者との差異を図ろうとする「個性化」の手段としての意味を見出している父親も見られた。

②上記のいずれのタイプの意味を見出しているかに関わらず、面接を行ったほとんどの父親たちは、子どもに中学受験をさせる（た）という自らの選択が、そうした選択ができない世帯との教育格差の維持・拡大につながる可能性を認識しながらも、自らの選択を否定しておらず、多かれ少なかれそれを正当なものと見なしていた。

③こうした父親たちの行動と意識は、階層間教育格差の縮小よりもむしろ維持・拡大にする効果を持つことは明らかである。これまで、統計的手法によって父親の子どもに対する教育期待が子どもの教育達成に一定の効果を持つことが確認されてきた。(3)で示した知見は、少なくとも子どもの教育達成に強い関心をもつ特定の層においては、そうした効果のある部分が「学校選択支援」や「受験勉強支援」といった父親の直接的な関与を介して生じている可能性を示唆するものである。

④ただし、父親たちの具体的な中学受験支援行動は、予め形成された意識によって一方的に規定された実践であるというよりも、むしろ自らの行動とそれに対する省察的な意味づけとの間のダイナミックな相互作用を伴って展開される再帰的（reflexive）な実践であった。同様に、家族の「教育戦略」も、必ずしも最初から父親と母親と子どもの間で一致しているようなものではなく、それぞれの異なる意向の間で何度となくすりあわせが行われ、時間と共に変化しうるような、極めて多層的で動態的な性質をもつものであった。これらの点に、家族の教育戦略ならびに階層再生産のプロセスにおける変化の契機を見出せる可能性が示唆された。

(5) 「ジェンダー研究」との関連では、次の知見が得られた。

①ほとんどの事例において、母親と父親の受験支援への関与の仕方は同様ではなかった。父親たちは、依然として〈扶養〉を最も重要な自らの役割と位置づけ、〈扶養〉役割を果たすのに支障のない範囲で他の役割を果たしていた。また、「学校選択支援」や「受験勉強支援」といった〈社会化〉役割の遂行が、母親と比べて父親の権威を高めていることはあっても、決してそれを低めている様子はうかがえなかった。

②したがって、中学受験に代表される子どもの学業支援への父親の積極的関与は、一方では家庭内男女平等を促進する実践でありながら、他方では、従来の母親役割の一部を取り込みつつ、より理想的で権威ある父親像・男性像を体現することを通して男性優位のジェンダー構造の正当化に寄与しうる実践でもあることが示唆された。

(6) 上記の知見を総合し、父親たちの実践を階層構造とジェンダー構造の変化に対する反応という観点から捉え直すことにより、次のことが示唆された。

都市在住高学歴中流階層の父親にとって、子どもの学業支援を中心とする家庭教育への関与は、次世代の階層下降を食い止めて首尾よく階層的再生産を成功させるとともに、家庭責任の夫婦間共有を図りながらも父親の権威を維持することに寄与するものであった。すなわち、中間層拡大の見通しが立ちにくくなったという階層

構造の変化と、男性の家庭責任が強調されるようになったというジェンダー構造の変化の両方に直面している彼らにとって、家庭教育への積極的関与という実践は、階層関係においてもジェンダー関係においても自らの優位性を維持する戦略として極めて有効なものである。

R. コンネルは、男性支配体制の変化と持続の過程を分析するキー概念として「ヘゲモニックな男性性」（権威と結びつき、他の男性性に比べて優位に位置づく男性性のパターンであり、男性支配の正当化戦略が具現化したもの）という概念を提唱している。本研究の知見は、父親による家庭教育の実践が、現代日本における「ヘゲモニックな男性性」の新たな構成要素の１つになりつつある可能性を示唆するものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 多賀太、「教育する父」の意識と行動－中学受験生の父親の事例分析から、教育科学セミナリー、査読有、第 43 号、2012、1-18
② 多賀太、「父親の家庭教育」言説と階層・ジェンダー構造の変化、教育科学セミナリー、査読有、第 41 号、2010、1-15（http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/bitstream/10112/4857/1/KU-1100-20100300-01.pdf）

〔学会発表〕（計６件）

① TAGA Futoshi, The Individualization of the Salaryman's Life: Changing Conditions of Japanese Hegemonic Masculinity, NAJS 2012 Conference, March 22, 2012, University of Gothenburg, Sweden
② 多賀太、子どもの中学受験にみる父親の教育意識、九州教育学会第 63 回大会、2011 年 12 月 11 日、宮崎大学
③ 多賀太、「教育する父」の教育意識－中学受験生の父親の事例分析から、日本教育社会学会第 63 回大会、2011 年 9 月 23 日、お茶の水女子大学
④ 多賀太、リスクとしての子育て？－仕事と育児をめぐるサラリーマンの葛藤、日独国際シンポジウム「ライフコース選択の臨界点」、2010 年 10 月 23 日、明治大学
⑤ 多賀太、「父親の家庭教育」言説とジェンダー／階層構造の変化、九州教育学会第 61 回大会、2009 年 11 月 22 日、鹿児島大学
⑥ TAGA Futoshi, Father As an Educator: Changing Class-gender Structure and Discourse on Fatherhood in Japan, 2009 International Conference of the JSAA-ICJLE, July 15, 2009, University of New South Wales, Australia

〔図書〕（計１件）

① 多賀太編著、揺らぐサラリーマン生活－仕事と家庭のはざまで、ミネルヴァ書房、2011、総ページ数 272

６．研究組織
(1)研究代表者
多賀　太（TAGA FUTOSHI）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：70284461
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし